

「婆アさんッ。」

「ハイ……………」

「暑いと言つて居るのが分りませんか、お前さんには……………」

「お暑う御座いませう……そんなに急いでお歸りになつては……………」

「急いで歸つたから暑いんではありません、この暑いのに未だ袴を着て居るのがお前さんの眼には見へませんかッ。」

「だつてそりやア仕方が御座いませぬ。」

「仕方がないことはありません、何せ早く單物を着せないんですッ、馬鹿なッ。」

「ですけれど妾にだつて差當り何うにも出来ないんで御座いますもの。」

「出来ないのをするのが女房の役目ですッ。」

(十八) お前さんの腰巻と私の禪でも

「時に婆アさん、酒屋は来たかえッ。」

「参りましたよッ、今日は何んとかして御都合して下さいましッて、妾ほんとうに

弱つて了ひました……………」

「そりやア何處の酒屋だ。」

「何處の酒屋ッて、家へ参る三河屋で御座いますわ。」

「未だ外に来たらう。」

「伊勢屋も参りましたし近江屋も参りました。」

「そりやア何處の酒屋だ。」

「皆家へ参つて居た酒屋で御座ります、今日は貴所まう廿八日で御座いますもの。」

「そんなことはお前さんに聞かしたつて知つて居ます。」

「そりやア御存じで御座りませうが、今日は如何程かお持ち歸りになつたんで御座いますか。」

『持つて歸りません……………』

『持つて歸らんと云つて平氣で居らッしやいますけれど、まう貴所、お米も絶えま  
したし、醤油や味噌も切れました……………』

『フム……………そりやア困つたのう。』

『今日お邸で出来なかつたんで御座いますか。』

『逆も出来る所の騒ぎじやない、この節はお勝手元が非常に御不如意のう。』

『でも二圓や三圓のお金が出来んことは御座りますまい。』

『何うして、二圓や三圓といふけれどその二圓や三圓が出来位なら私も未だ

それ程苦勞はしないけれど、イヤモウ家の世帯よりも餘程苦しいのでのう。』

『家よりも酷いんで御座いますか、お邸が何せで御座いますしやうねえ。』

『何セツてお金がないんだ、毎月のお生活ばかりが百圓づゝも不足をして居るんで

のう、酒屋から米屋、八百屋から新炭屋……………それは、皆大した滞りになつて居る

今日も今日とて酒屋が坐り込んださうだが、その酒屋が家へ来た筈だが、何んと言  
つて歸りました。』

『そんな酒屋は別に参りませんが……………』

『フム……………來ない……………そりやア幸福だツたが、併し明日は又お邸へ坐り込むだらう

が、イヤまう月末になると何時も壽命を縮めて了ふ……………』

『妾だツてこの節はほんとうに壽命を縮めて了ひますわ……………全く遣り繰りが就かな

いんで御座りますもの……………』

『贅澤を言ひなさんな、お前さんが家の世帯で壽命を縮める位なら私はまう疾ッく

に死んで居なければならん筈だ。』

『それはさうと明日のお米なんか何う致しませう。』

『何う致しませうツて、そりやアお前さんの役目じやないか、何んとか都合をし

なさい。』

「何んとか都合をせえと仰しやツても妾には何んとも都合の附けやうがないじやア御座いませんか。」

「私にだッて何んとも出来ん。」

「貴所にさへ出来なければ妾には尚ほ出来ないじやア御座いませんか。」

「だッてそれがお前さんの役目だから仕方がない……………」

「そんな無理なことばかり仰しやツて……………」

「無理だッて仕方がない、都合が出来なければ何んでも賣り拂ひなさい。」

「今日も洗ひ浚ひ賣てお酒を買たんで御座いますもの、さうくはありませんわ。」

「今日の酒は如何程……………」

「矢張り七銭のものが十銭で御座いますわ。」

「何んだか馬鹿に少ないなア、まうありやアしない……………」

「さうで御座いますしやう、二合もないお酒をまう一時間も飲んで居らッしやるんぞ。」

御座いますもの……………」

「だからまう少し買つて来なさい……………」

「又そんな御無理を……………それだッて漸く買つて置いたんじやア御座いませんか、それに肝腎のお米さへない仕末なんで御座いますもの。」

「だから何んか賣り拂ひなさい。」

「ですから何があるんで御座います……………」

「何んかあるだらう、衣類のボロとか道具の不用のやうなものは……………」

「そんなものは皆賣つて了ひました……………第一さう賣つてばかり居つて終に何うなるつもりで御座います、毎月若干づゝ不足になつて往くばかりで御座りますもの……………」

「文句を言ひなさんな、その中には三郎が出世をします……………」

「その中と言つたッて未だ大分永いことじやアありませんか。」

「なアに、譯はありません、まう直き中學を卒業するから、高等學校、大學校、それから學士になつて、博士になつて……さうなるを私もお前さんも左り團扇だ。」  
「ほんとうに早くさうなつて呉れば好う御座いますけれどねえ……。」  
「なアに、譯はありません、だからまう一合買つて來なさい。」  
「だつてそりやア今も申上げるやうに……。」  
「好いから買つて來なさい、だからさ、そりやア明日のことは明日で好いなアに、何んか賣るものはあるよ……さうく、お前さんの櫛や簪などがあるだらう、そんなお婆アさんになつちやアまう要る筈がない。」  
「櫛や簪などはまう十年前に御座りません。」  
「じやア大小が未だ一二本残つて居る筈だ。」  
「それだつて貴所、先日屑屋に七十錢ばかりでお賣りになつたじやア御座りませんか。」

「アム……さうだつたかのう、じやア簪などは要らんだらう、何うせ入れるやうな衣類もない。」  
「だつて之れ一ツ位なくつちやア見ツともなくツて仕様が御座りません、今じやア道具らしい道具は之れだけなんですもの、之れがなかつたら家の中は空家も同然じやア御座りませんか。」  
「じやア其處の鏡でも賣んなさい、お婆アさんの癖にまうお化粧でもあるまい。」  
「そりやア賣つたつて好う御座いますけれど、併し縁日で十五錢で買つた鏡で御座りますよ……。」  
「それでも五錢位にはなるだらう。」  
「五錢になつたつて仕様がなないじやア御座りませんか。」  
「それから……さうく、具足櫃がある筈だ。」  
「彼りやア米櫃にして御座います……。」

『じやア何んでも賣んなさい、四疊半の畳なごも要らん。』

『だってお邸の物じやア御座いませんか。』

『なアに構はんツ。』

『構はんと仰しやツても第一不自由で困ります……。』

『じやアお前さんの腰巻きや私の極なごを纏めて賣んなさい。』

『そんな馬鹿なことが……貴所ツ……。』

『なアに構ひません……やア、誰か来たやうだぞ、三郎かツ。』

『御免下さいましツ。』

(十九) 折角の志

不意の訪問に早くもそれと悟つたのは婆アさんである。

『若し貴所ツ、又参りましたよツ。』

『何んです、又参りましたとは……。』

『三河屋が参りましたよツ。』

『あア、三河屋か、恰度好い所へ来た、じやア早速二合ばかりさう言つて遣んなさい。』

『何んで御座いますねえ、貴所ツ、お酒所の騒ぎであるもんで御座いますか、今日は貴所が出て何んとか言つて断はつて下さいまし、妾が言つた位では中々承知しないんで御座いますから……。』

『じやア矢ツ張り催促か……煩さいなア、居ないと言ひなさいツ、居ないと……。』

『御免下さいまし、御免下さいましツ。』

『ソノ婆アさん、早く出なさいと言ふにツ。』

『だって妾には駄目で御座いますよ。』

『好いから早く出なさいと言ふにツ、留守だと言へば好いよ、留守だと……。』

「御免下さい、御免下さい。」

「何をぐづぐして居るんだよ、婆アさん。」

「御免下さい、お留守で御座いますか。」

「ハア、留守ですよ……。」

「さう言ふお聲は旦那じやア御座いませんか。」

「之りやア否かん、だから婆アさん早く出なさいと言ふに。」

「御免下さい。」

「誰方……。」

「ハイ、三河屋で御座います……。」

「やア、三河屋か、好う来たのう。」

「餘まり好くも参りません。」

「まア上んなさい、其處じやア話しが出来ん。」

「さうで御座いますか、じやア御免蒙つて……。」

「婆アさん、坐布團を持って来なさい……それから何んか茶菓子でも……なに、無い、無ければ買つて来なさい、お錢がないツて、よくいるんなことを言ふなア、だから平生から、用意して置きなさいと言ふんだ、こんな時に差當り困るじやないか、さア、三河屋さん、すつと前の方へ……。」

平生は横柄な言葉を使つて、借金取りなど言へば頭から怒鳴り附ける老人も、今日は何んと思つたのか打つて變つた慰懃の体、傍に控へて居る婆アさんさへ呆氣に取られて老人の顔を物の不思議に眺めて居る。

「じやア御免を蒙りますが……。」

すいと一膝いざり寄つて、徐ろに老人の顔を眺める三河屋の主人は嫣然とせすに四角張つて居る。

「さア、すつと御遠慮なく……何うも好い陽氣になりましたなア。」

『左様で……時に旦那ッ……。』

『この分じやア今年は豊年だらうなア……。』

『左様で……時に旦那ッ……。』

『この節は何うだね、お前さん所などはさぞ儲かるだらう……。』

『何う致しまして、旦那ッ……。』

『なアに、さうじやない、お前さんとは中々商法が旨いからなア、華客に大層信用がある、何んでも商法といふものは信用がなくツちやア駄目だ。』

『左様で……時に旦那ッ……。』

『それにお前さん所は腹が大きいから感心だ、何んでも商法などいふものは腹を大きく持たなければ駄目だ。』

『ですけれど旦那ッ……。』

『それにお前さん所は貸買りを平氣にするから豪い、之れが第一外の酒屋の一寸真

似が出来ない所だ、實に感心だよ。』

『ですけれど旦那ッ、その貸買りをしたんで近頃は何うも……。』

『ウム、景氣が好いたらう、さうなくては又叶はん筈だ、何んでも貸買りを平氣下して居れば一時は一寸困まるやうには思はれても後々のそれが利益になるんだから、其處へ目を附けて居るとは豪い、さすがに大商人にならうといふお前さんだ、私は何時も感心して婆アさんと噂をして居るんだ、のう婆アさんッ。』

『ですけれど旦那ッ……。』

『ほんとうにお前さんは感心だよ。』

『時に旦那ッ……。』

『實に豪いよ、お前さんは……。』

『斯う言つちやア何んですけれど、私の方でも實はその……。』

『時に何處になりなると、お前さんは……。』

『そんなことは何うでも好う御座りますが、時に旦那ッ……。』

『フム、成程、未だお若いもんだ……。』

『今日はその……實はその……何んとかして……。』

『だからその……お若いに誠に感心なものだ。』

『旦那ッ、そんな外言ばかり仰しやらずに、今日は何んとかして下さらなくッちやア困ります。』

『左様、今日は何うも中々の暑さで、この分じやアもう單物だが、私は未だ……な  
にその……お前さんは成程、もう單物を着て居なさるな、そりやア感心だ。』

『ねえ、旦那ッ、そんな御冗談ばかり仰しやらずに、子供の使ひじやアあるまいし  
……態々遣つて来たんですからねえ。』

『ハ、ア、お前さんにも子供がありなさるのか、そりやアお幸福だ、實は私も悴  
を一人持つて居るが、イヤ何うも中々育てるにも容易なことちやアない。』

『そんなことを聞きに来たんじやアありませんッ。』

『それでもお陰様に何うやら斯うやら中學へ遣つて置くが……イヤ何うも中々仇お  
ろそかじやアありませんッ。』

『そんなことは何うでも好いが……。』

『なアに、何うでも好いと言ひなさるけれど、それが中々何うでも好くはないんで  
イヤ何うも費用がかかるんで弱つて居るんだ、尤も直き學士になつて……それから  
博士といふことになるんだから、私もまアそれを樂みに待つて居るんだが……イヤ  
何うも待ち遠しいもんだ、お前さんだつて子供を持つたら分るだらうが……。』

『冗談は好い加減にして、ねえ旦那ッ。』

『ハイ、それはもう冗談所の騒ぎじやアありません……。』

『仕様がないなア、白ツばくれやがツて……ねえ、お女房さんッ、貴女から何んこ  
か一ツ言つて下さいな、實際遊びに来たんじやアありませんからねえ。』



「ハイ、それはもうほんとうにお察しして居るんで御座いますけれど……」

「ですから旦那に願つて下さいな。」

「ほんとうにねえ……若し貴所……」

「やア、もう軽くなつた……」

「若し貴所……」

「軽いのも好いが何うも酒が悪いんでう。」

「若し、貴所ツ、貴所ツ。」

「だから私が何時も言つて居るんだ、他の酒屋から買はないでこの三河屋さんからばかり買いなさいツて。」

「若し、貴所ツ、それじやア妾も困るじやアありませんかツ。」

「實際この酒じやア如何程酒呑みの私でも少々恐れ入る、して見ると三河屋さんの酒は格別だ、勉強しなざる上に酒が好いんだから……誠にハヤ感心なものだ。」

「若し、貴所ツ、貴所ツ……」

「ア痛ツ、何をするんだなア、婆アさん、若いもんじやアあるまいし、膝なんかツねツて……ア痛ツ、何をするんだといふにツ、斯うやつて三河屋さんも居らツしやるじやアないか、少ツとたしなみなさい、好い年をして。」

「ですからさツ、貴所ツ……」

「何がですからです、分らんことばかり言つて居つて……」

「ですからさ、三河屋さんが斯うやつて待つて居らツしやるじやアありませんかツ。」

「何をツ。」

「何をツて、今日は是非何んとか都合して呉れツて言つて居らツしやるんですよツ。」

「あ、成程……」

『ですから何んとか貴所から言つて上げて下さい。』

『何を言つて上げるんだ。』

『それじゃア妻が困るじやアありませんか、中に立つて居て……』

『フム、成程……それだから何うだつて……』

『困りますねえ、貴所も御承知のやうに、永いこと三河屋さんから拜借して居るんじやア御座いませんか。』

『何をッ……』

『何をッで貴所のお酒の代じやアありませんか……』

『あ、成程、酒代か……』

『ハア、酒代で御座りますわ、恰度十六圓ばかり……』

『成程……じやア酒代の催促に來なすつたのか、じやア早くさう言へば好いに……』

『所で旦那ッ、今お女房さんの仰しやるやうに、實はまう……』

『ハア成程……さア、サツと前の方へ……』

『なアに、茲で澤山で御座います。』

『まアさう仰しやらずに……さア、一杯上げまじやう。』

『ご、何う致しまして……まう澤山……』

『未だ飲まん中から澤山といふことはないだらう。』

『なアに、まう澤山……頂いたも同じで御座りますから……』

『なアに、さう遠慮をせんでも好い、實はまう私の飲むのもないだけ……』

『ですから澤山……』

『だが構はんツ、さア一ツ。』

『まう澤山……』

『まア、さう言はずに一ツ、折角の志だ。』

(二一〇) あ、アツ三太夫も厭になつた

「婆アさんくッ、さッさと袴を出しなさい、朝といふと何時もぐづくして居なさる、困つたもんだ。」

「未だ貴所、七時で御座いますよ、お出かけには少ツと早う御座いませんか。」

「早くないからさッさとしなさいと言ふんだ、餘計なことばかり言つて。」

「さうで御座いますか、妾は又何時もより一時間も早う御座いますから、又時計でもお見違ひなすツたんじやアないかと存じまして……。」

「お前さんじやアあるまいし、時計など見違つて堪るもんですか、今日はお邸の御用で小石川の御本家へ廻らねばならないんだ。」

「さうで御座いますか、ではお袴は茲に置きます……それから貴所、下駄は何うなさつたんで御座います、大變好い下駄を穿いてお歸りになりましたが、又穿き違ひ

てお出でになつたんじやア御座いませんか。」

「馬鹿を言ひなさんな、お前さんじやアあるまいし、未だそんなに老祿はしません、そりやア書生の奴が私の下駄を溝へ捨てたといふんで、仕方なく書生の下駄を穿いて来たんだ。」

「さうで御座いますか、貴所の下駄は溝へ捨てたツて何うせ惜しくはないんで御座いますけれど、それじやア書生さんがお困りで御座いませうやう。」

「餘計なことを言ひなさんな、だが昨日は文句を言つたけれど實は好く捨て、呉れた、お蔭で下駄も買はずに済んだ、だから婆アさん、今日は下駄を買つたと思つてそれだけ餘分に酒を買つて置きなさい。」

「又そんなことを仰しやいます、昨日も申上げたやうに貴所、中々酒處の騒ぎじやアないんで御座いませんか、昨夜も昨夜で三河屋に彼んなにお詫もなさつた癖に……。」

「御免下さいッ、御免下さいッ。」

「アラッ、こんな朝ッばらから之誰れか押しかけて来たよ。」

「好いからぐづく言はずにさッさとしなさい、私が斯うやつて最前から待つて居るのに……。」

「お袴は出して置きましたよ。」

「袴じやありません、煙草入れは何うしましたッ。」

「煙草入れはちやアんとお腰に挿して居らッしやるじやア御座いませんか。」

「あゝさうか、じやア往つて来るよ、好いかえ、留守を氣を附けなさい、それから昨日のやうに又病氣にならんやうに……。」

「やアッ、之れは旦那で御座りますか、恰度好い所でお目にかへりました。」

「さういふお前さんは誰だえ、私は遂ぞ見たことはないが。」

「冗談言つちやア吾けませんせ、旦那ッ、貴所は好く私の店へ入らッしやッて、今

度は間違はせないから今日だけは非助けて呉れなんかッて……さうく、恰度そのお姿で、店の前でよくこつくと頭を下げたじやア御座いませんか。」

「ハテナ、私は何うも覺えはないが、之りやア他の家と間違つて來なすッたんじやないかねッ。」

「冗談言つちやア否けません、昨夜三河屋さんからすッかり聞いて來ました、貴所は大變白ッばくれなさるじやアお上手なさうだが、成程之りやア旨いもんだ。」

「ハテナ、之りやア變なことを言ひなさるが、何うも私には分らん。」

「貴所には分らんじやアとも私の方では分つて居ます、ハイ、貴所のことを店の小僧共は神主のお札配りと言つて居ます。」

「神主のお札配り、私はそんなもんじやない、そりやアいよゝ人違ひだ。」

「冗談言つちやア否けませんせ、神主のお札配りといふのはそりやア貴所の禪名な

んで、ハイ、私は横町の米屋で御座います……。」

「横町の米屋……横町には如何程も米屋があるが……。」

「横町の越後屋で御座います。」

「あ、横町の越後屋さんかじやア早くさう言へば好いに……。」

「お分りになりましたか。」

「さう言へば見覚えがある。」

「見覚えがなくって堪るもんですか、彼んなにちよいく店へ入らッしやッたんですもの。」

「ハッハッハ、違ひないく、相不変御機嫌だのう。」

「そんなことは何うでも好う御座いますが、時に旦那ッ。」

「御機嫌で結構だ、御商法も繁昌かのう。」

「その手も聞いて来ましたよ、私は三河屋さんのやうなお人好しではありませんからねえ、ハイ、今日は是非何んとかして下さらなければ茲を動きません。」

「ハッハッハ、じやア矢ッ張り御催促か……。」

「矢ッ張り御催促もないもんだ、ねえ、旦那ッ、ほんとうに冗談じやアありませんせ、十二圓もある所を昨年の暮れにたッた五十錢頂いた丈けなんですもの。」

「ハッハッハ、そりやア少ツと酷いのう、ハッハッハ。」

「笑ひごツちやアありませんせ、ほんとうに。」

「ハッハッハ、ハッハッハ、イヤまう降参々々ッ、ハッハッハ。」

「そんなに馬鹿笑へなすッたッて少ツとも分らんじやアありませんか、全体何うして下さるんですッ。」

「ハッハッハ、ハッハッハ、それがその……ハッハッハ。」

「冗談じやアありませんせ、人を馬鹿にして。」

「ハッハッハ、ハッハッハ、何もその……馬鹿にする譯ではないが、ハッハッハ、ハッハッハ。」

『それが馬鹿にして居るんじやアありませんか、今日は是非何とかして下さらなくツちやア、ねえ、旦那……』

『ハツハツハ、ハツハツハ、所がその……ハツハツハ、相不変ないよ、ハツハツハ。』

『相不変ないじやア困ります。』

『困つても仕方がない、ハツハツハ。』

『仕方がないと言つて平気で居られるんじやア此方が遣り切れません。』

『ハツハツハ、お前の方より此方の方が餘ッ程遣り切れんのでう、ハツハツハ。』

『じやア何うしやうツて言ふんですツ。』

『別に何うもその……ハツハツハ、まアその中に何とかのう、ハツハツハ。』

『その中へは困ります、その中へが恰度半年にもなるじやアありませんか。』

『ハア、そんなになるかのう、ハツハツハ、月日の経つのは早いものだ、ハツハツハ。』

ハ。

『馬鹿にしなさんな、人が真面目で言つて居るのに……』

『ハツハツハ、怒んなすツたの、ハツハツハ。』

『怒りますさ、人を馬鹿にして……』

『ハツハツハ、怒つたツて仕方がない、ハツハツハ。』

『ですから何とかして下さい。』

『だからその中に何とかするよ、ハツハツハ、それに忤ももう追ッ附け博士になる筈だからのう、ハツハツハ。』

『坊ッちやんが博士にツ。』

『ハツハツハ、坊ッちやんではないよ、ハツハツハ、博士になるんだ。』

『だって未だ十八九でしかないじやありませんかツ。』

『ハツハツハ、でも博士になるんだ、ハツハツハ、ハツハツハ。』

『そんな悠長なことを言つて居られては困ります、何とか仕末を附けて下さらなくツちやア茲は動きませんツ。』

『ハツハツハ、動きなさらんか、ハツハツハ、じやア私は御免を蒙りましやう、お邸へ出かける所なんだからのう、ハツハツハ。』

『冗談言つちやア否けません、貴所に出かけられると否けないからこんなに朝ッぱらから遣つて来たんでさア。』

『ハツハツハ、でも仕方がない、私は恰度出かける所なんでのう、ハツハツハ、じやア緩くりして茶でも飲んで往きなさい、ハツハツハ、これ婆アさんツ、越後屋さんに茶でも上げなさい、ハツハツハ。』

『茶所の騒ぎであるもんですかツ、旦那ッ。』

『まアさう言はずに緩くり遊んで往きなさい、ハツハツハ、之れが若いもんなら物騒だか知らんが、こんな敏くちや婆アさんでは如何程物好きなお前でも……ハツハ』

ツハ、まア大丈夫だらう……ハツハツハ。』

『旦那ッ……ツ……。』

『じやア安心して往つて来ます、ハツハツハ。』

『旦那ッ……ツ、若し……ツ、旦那ッ。』

『じやア緩ツくり……。』

『旦那ッ……。』

『あゝア、三太夫も厭になつた……。』

滑稽三太夫終

明治四十一年七月十五日印刷  
明治四十一年八月八日發行

滑稽三太夫  
\*正價金貳拾五錢\*



著者 五峰仙史

發行者 岩崎鐵次郎

印刷者 木村榮吉

印刷所 英文社

東京市京橋區采女町十番地

發兌元

東京市神田區鍋町二十一番地  
電話本局三〇六七番  
振替貯金口座番號 四五二七

大 學 館

(1) 大 學 館 發 兌 小 說 類 目

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第一編 奇人の旅行 價廿五錢 郵稅四錢

二十世紀の摩栗毛は世界が舞臺である奇人あり其旅費百廿萬弗米國に鐵山王を驚かし太平洋に駭露西亞を叩きし花の英國交際場裡に傍若無人の奇劇を演ず美人は馳る高懸は魂消え讀者亦一讀三嘆

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第二編 世界武者修行 價廿五錢 郵稅四錢

此の編節を分つ二十四冒頭の美人雲霧の件早く讀者の胸を奪ふ主人公金藤次が如意棒を掲げて世界大陸を横行飛躍或は任侠或は變勇碧眼豚尾の膽玉を挫いて痛快壯絶

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第三編 空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

未曾有の新發明空中大飛行艇は日本の理學士と編造の博士の手に依つて成り博士はこれを悪用して美人天空に飛ぶの轡事を惹起し巴里市全市で大問題なる理學士が羨俵なる同志と共に捜索に向ふ壯絶雷轟を驚し痛恨天女を呼ばしむ

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第四編 怪人奇談 價廿五錢 郵稅四錢

眉目清秀の一青年、一妖婆が咒文の爲めに其妻を醜惡なる友人の妾と變せられて煩悶痛苦する事幾句再び元の體に回へる不思議なる話なり奇俠士は眞壯にして戦場の花は悲壯に共に婦女童幼の愛護措かざるべきもの

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第五編 魔島の奇跡 價廿五錢 郵稅四錢

航海王の大變應船乗伯爵の初航海魔島の俘人間生埋の法墓の底の殺人地球の極の宛山地底の美少年白髮の老人さ九人の黒奴頭亡しの苦行片目と世界第一富家羊に化けた人間美人城の驚歎舞空中電氣の作用三十二の金門人魚と幽霊の言葉航海王の歸國附録に「魔窟の三人」「暗夜の白刃」を添ふ

押川春浪著 (寫眞版挿入)

● 世界怪奇譚 第六編 續空中大飛行艇 價廿五錢 郵稅四錢

美人捜索に向ひたる空中大飛行艇の面々は摩摠霧霧幾度か苦み猛獸變人の爲め塵々難に逢ひ遂に美人を取戻し悪博士武柄を誅し意氣揚々として歸來し巴里全市の大歡迎に局を結ぶ附録として善惡報の行衛に就いて讀者よりの答案を附したれば興味更に深きものある可て





(4) 目書類説小兌發館學大

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第一編  
 ●小説 青年英雄團 價廿五錢 郵稅四錢  
 世界統一論起り志士の會合あり、日本の才女俳優となつて巴里に聲價を博す忽ち西比利亞の牢獄に囚へられて事件々錯綜す!!

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第二編

●小説 世界發展俱樂部 價廿五錢 郵稅四錢  
 俱樂部の總理は文武兼備の老練家、會員は多士濟々たり傑出せるは學殖深奥の青年と溫柔無愁の少女、眞にこれ双玉!!

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第三編

●小説 怪中の怪 價廿五錢 郵稅四錢  
 稱代の珍寶を探らんとして「人殺し谷」の兇賊と戦ひ前代未聞の人? 歌を捕へ獲物を研究し、億万の富を致す美人才子哲士武人互に競ふ。

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第四編

●小説 賊巢探險 價廿五錢 郵稅四錢  
 毒藥の探拾、美羽の獲獲、意外の處に意外の兇手、父子の再會、思はぬ赤繩、本編の経緯、奇々怪々の文字!!

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第五編

●小説 キウリアス、アイランド 價廿五錢 郵稅四錢  
 新島出現して黄金測る可からず、探險の勇士美人沙漠を渡り象鼻を試み、困難又困難功名果して離れの手に落つ!!

乾坤獨歩者 (寫眞版挿入)  
 世界統一冒險譚第六編

●小説 寶窟 價廿五錢 郵稅四錢  
 壁地に入りて慘刑に遇ひ不思議の術、秘傳の妙薬に依て蘇る、奇怪習俗に苦められて屈せず勇士美人並に大膽を立つ

(5) 目書類説小兌發館學大

羽化仙史著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 百難旅行 價二十錢 郵稅四錢  
 一難されば一難來り前門虎を防げば後門狼を迎ふ、幾度か宛に困み屢々災に遇ひ或は放浪、或は漂流、水火の巻に出入し劍戟の間に馳驅す、一少年が豪勇と義膽とは讀む者をして感憤興起せしめずんばあらず、毫にこれ冒險小説中の傑作。

加瀬花那氏著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 モンゴリヤ妖怪村 價廿五錢 郵稅四錢  
 征露の役軍中より渡されて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさまゝの怪事奇蹟に遭遇し或は虎に養はれ妖怪を退治し幽霊と闘ひ危難に類し災厄に遇ひ途に戦死せしと思はれし三勇士が恙なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 奇女無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢  
 一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉するが如し而も膽力遙に有聲男子を凌ぐ一錢の貯けなく英國、佛蘭西、獨逸、米國等歐洲大陸を跋渉し到處奇談珍説の中心となる讀者幸に恍惚さして自失せずんば幸なり。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 世界奇拔新アラビヤナイト 價廿五錢 郵稅四錢  
 「アラビヤナイト」は天下の奇書にして苟くも小説を作るもの一讀せざる事なし本書はステウエンソンの原書を基として著者が例の豊富なる思想を流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味遙に「アラビヤナイト」の上にあ

押川春浪君著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 世界奇拔ヘーグ奇怪塔 價廿五錢 郵稅四錢  
 奇怪塔あり、大戦亂を醸し、勇士の最期に及び黒百合花の發明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽霊を顯出するの奇譚を経とし、絶世の美人が勇俠を縛とす原書は歐洲大評判の小説更に著者の奇想を加へ麗筆を振ふて此の編成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪君著 (寫眞版挿入)  
 ●小説 世界奇拔立身膝栗毛 價廿五錢 郵稅四錢  
 那翁が佛國の皇帝となりし時、玉座の前に來りし一少年こそ本編の主人公にて、其後那翁の批評の言に勵まされ、偉大の人物となりしや否やは彼れが運令の胸に跨つて奇なる人生の長旅を試みし所の物語、山あり、河あり、美人あり、覽城あり、その面白き事恰も武者修行が世界各國を經廻り千變萬化の奇事に遭遇するに異ならず。

大館發兌小類書目 (6)

**●新空中旅行** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 一王國の王子が即位に即き攝政の叔父の降臨を恐るに、王位を奪はんと欲する。此の間に王子は、空を飛行する等自衛するに、秘術を習得し、空中に飛翔し、王位を奪はんと欲する。此の間に王子は、空を飛行する等自衛するに、秘術を習得し、空中に飛翔し、王位を奪はんと欲する。

**●航海奇譚** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 大洋と言ふに、快也、航海と言ふに、壯也、奇譚といふに至つては、己に競ふて、讀まざる能はず、太平洋を馳る船大西洋に沈む船、甲板に起りたる神出鬼没の活劇、奇絶にして、趣味多く、快絶にして、感興甚だ。

**●貧乏旅行** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 夢中の空乏は、辻堂に一泊して、地蔵の慈悲を感じ、橋を渡り、化して、旅の憂さを悟り、愈々進みて、愈々究し、愈々究して、愈々男を得、此に於てか、奇談百出、珍話多し、として、湧く一讀、柔弱男子の懶眼を覺醒するに足るものあり。

**●無錢旅行** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 旅行の面白味は、汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして、千山萬壑を跋渉するに在り、風を餐ひ、露を飲み、乞食と合宿するに、幸甚。忽ち十數版を重ねたり、以て如何に、愉快なる、讀物なるを、知れ。

**●野宿旅行** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 汽車の便を捨て、自轉車の捷を藉り、膝栗毛に頼り、三つの風、来浪に到る處に、滑稽を演じ、失策を惹起し、而も豪放、豪傑を破る、難逢は、每に愈々勇を、増し、宵天井に草枕、天地の、呑氣、此上もなき、一讀、噴飯、滑稽無比の旅行記なり。

**●乞食旅行** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 腹に萬卷の書を貯へ、ながら旅行した、に、缺腕を片手に、乞食の仲間に入り、して、彼處此處を、経廻り、つた、貧賤を、片手に、三日した、ら、止められ、れ、乞食の境、遇は、乞食の、多、あら、う、か、來、城、氏の、無錢旅行を、讀んだ、人は、その、趣味の、多、事を、悟る、で、あら、う。

大館發兌小類書目 (7)

**●滑稽大寄席** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 平井川南君著

**●滑稽落語集** (寫真版挿入) 價廿五錢  
 類聚滑稽著

**●大智話** (寫真版挿入) 價十五錢  
 機川老禪著

**●滑稽大集會** (寫真版挿入) 價十五錢  
 映笑子著

**●滑稽種本會** (寫真版挿入) 價十五錢  
 可笑樓喜樂著

**●滑稽百話** (寫真版挿入) 價十五錢  
 甘薯子著

**●軍人頓智叢談** (寫真版挿入) 價十五錢  
 機轉于著

**●滑稽珍話會** (寫真版挿入) 價十五錢  
 笑門福來著

**●西洋笑話五百珍** (寫真版挿入) 價十八錢  
 燕雀樓醉客著

**●一休和尚頓智笑話** (寫真版挿入) 價十五錢  
 野狐狂禪著

**●大久保彦左衛門笑話** (寫真版挿入) 價十八錢  
 天籟居士著

**●曾呂利新左衛門笑話** (寫真版挿入) 價十八錢  
 南園生著

**●大岡越前守頓智談** (寫真版挿入) 價十五錢  
 圖書狂生著

**●水戸黃門奇行談** (寫真版挿入) 價十八錢  
 尾花庵二十坊著

**●大笑下女百話** (寫真版挿入) 價十五錢  
 尾花庵二十坊著

**●大笑小僧百話** (寫真版挿入) 價十五錢  
 年小僧與太郎著

**●續東海道膝栗毛** (寫真版挿入) 價十八錢  
 十返舎一九著

**●續東海道膝栗毛** (寫真版挿入) 價十八錢  
 十返舎一九著

**●金毘羅宮島膝栗毛** (寫真版挿入) 價十五錢  
 十返舎一九著



大學生館發兌小說類書目

(10)

東京二六新聞連載 三宅青軒著 (寫真版挿入)  
 ●小説 我儘太郎 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●小説 續我儘太郎 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●鹿島櫻菫著 (寫真版挿入)  
 ●小説 野原の怪郎 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●萬朝報連載 三宅青軒著 (寫真版挿入)  
 ●小説 不思議の娘 價三十錢 郵稅四錢  
 ●曉風山人著 (寫真版挿入)  
 ●小説 秘密の怪洞 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●鹿島櫻菫著 (寫真版挿入)  
 ●小説 世界の秘密國 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●鹿島櫻菫著 (寫真版挿入)  
 ●小説 無底湖の秘密 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●トベツ著 (寫真版挿入)  
 ●小説 不死の靈窟 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●正岡麟陽著 (寫真版挿入)  
 ●小説 孤島の秘密 價三十錢 郵稅四錢  
 ●奇談 續孤島の秘密 價三十錢 郵稅四錢

價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢

●兩酒舍主人譚 (寫真版挿入)  
 ●小説 怪僧 價三十錢 郵稅四錢  
 ●京北隱士著 (寫真版挿入)  
 ●小説 二人令嬢 價三十錢 郵稅四錢  
 ●加瀬花那君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 仙窟 價十八錢 郵稅四錢  
 ●鹿島櫻菫著 (寫真版挿入)  
 ●小説 美人島探險 價十八錢 郵稅四錢  
 ●三宅青軒著 (寫真版挿入)  
 ●小説 幽霊の寫真人 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●河越輝子女史著 (寫真版挿入)  
 ●小説 怪美人 價三十錢 郵稅四錢  
 ●押川春浪著 (寫真版挿入)  
 ●小説 千年後の世界 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●東京二六新聞掲載懸賞小説 (寫真版挿入)  
 ●小説 優殺 價三十錢 郵稅四錢  
 ●羽化仙史著 (寫真版挿入)  
 ●小説 妖姫の生話 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●臨病古武士著 (寫真版挿入)  
 ●小説 妖怪新百話 價三十錢 郵稅四錢

價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價十八錢 郵稅四錢  
 價十八錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢

大學生館發兌小說類書目

(11)

●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 新不如歸 價三十錢 郵稅四錢  
 ●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 ハイカラ令嬢 價三十錢 郵稅四錢  
 ●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 續ハイカラ令嬢 價三十錢 郵稅四錢  
 ●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 可憐 價三十錢 郵稅四錢  
 ●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 續可憐 價三十錢 郵稅四錢  
 ●藤原嶺葉君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀の妻 價三十錢 郵稅四錢  
 ●花岡小史著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀の妻 價三十錢 郵稅四錢  
 ●無名氏著 (寫真版挿入)  
 ●小説 貞不貞の縁 價三十錢 郵稅四錢  
 ●草の庭人著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀夫婦 價廿五錢 郵稅四錢

價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢

●草の庭人著 (寫真版挿入)  
 ●小説 人生の行路 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●廣津柳浪君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 女天の坊 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●草の庭人著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀の夢 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●草の庭人著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀の夢 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●池田錦水君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 戀の一年有半 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●河村扶桑君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 女學生氣質 價廿五錢 郵稅四錢  
 ●井上九郎君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 新婚百話 價二十錢 郵稅四錢  
 ●河村扶桑君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 武士道百話 價十五錢 郵稅四錢  
 ●長田偶得君著 (寫真版挿入)  
 ●小説 明治六十大臣 價三十錢 郵稅四錢

價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價廿五錢 郵稅四錢  
 價二十錢 郵稅四錢  
 價十五錢 郵稅四錢  
 價三十錢 郵稅四錢

大學生發兌小說類書目

(12)

● 國境士著 (寫真版挿入) 大臣の書生時代 郵税三十錢  
 ● 矢野浩浪著 (寫真版挿入) 食客時代 郵税四十錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 無錢修學 郵税廿五錢  
 ● 墨堤隱士著 (寫真版挿入) 青年人物の食客時代 郵税十八錢  
 ● 墨堤隱士著 (寫真版挿入) 立志 郵税四錢  
 ● 墨堤隱士著 (寫真版挿入) 商人豪商の雇人の時代 郵税十五錢  
 ● 西山筑濱著 (寫真版挿入) 品性英雄の道樂 郵税二十錢  
 ● 桐友散士著 (寫真版挿入) 奇觀夜の女 郵税廿五錢  
 ● 覆面散士著 (寫真版挿入) 社會明治娘評判 郵税四錢  
 ● 原田東風著 (寫真版挿入) 木賃 郵税廿五錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 奥様ご嬢様 郵税四錢

郵税三十錢 郵税四十錢 郵税廿五錢 郵税十八錢 郵税四錢 郵税十五錢 郵税二十錢 郵税廿五錢 郵税四錢 郵税廿五錢 郵税四錢 郵税廿五錢

● 池田錦水著 (寫真版挿入) 婦人ご戀愛 郵税二十錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 各境戀の解 郵税四錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 各面戀の婦人氣質 郵税三十錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 社會戀の婦人氣質 郵税三十錢  
 ● 池田錦水著 (寫真版挿入) 各面女心の解剖 郵税四錢  
 ● 長田偶得著 (寫真版挿入) 妖怪奇談 郵税十五錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 新婦の秘密 郵税廿五錢  
 ● 草野人作 (寫真版挿入) 深山の夫婦 郵税廿五錢  
 ● 草野人作 (寫真版挿入) 家庭の理想 郵税廿五錢  
 ● 須藤泉著 (寫真版挿入) 小庭新想の果 郵税四錢

郵税二十錢 郵税四錢 郵税三十錢 郵税三十錢 郵税四錢 郵税十五錢 郵税廿五錢 郵税廿五錢 郵税廿五錢 郵税四錢 郵税廿五錢

大學生發兌小說類書目

(13)

● 生田斐山人著 (寫真版挿入) 族の戀 郵税廿五錢  
 ● 羽化仙史著 (寫真版挿入) 家庭貴族 郵税四錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 家庭妻腹華 郵税四錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 家庭續妻腹華 郵税四錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 家庭立志兄 郵税四錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 家庭立志兄 郵税四錢  
 ● 逆川樓主人著 (寫真版挿入) 家庭露 郵税四錢  
 ● 福田季月著 (寫真版挿入) 家庭臆病將 郵税四錢  
 ● 曉風山人著 (寫真版挿入) 家庭魔窟 郵税四錢  
 ● 羽化仙史著 (寫真版挿入) 家庭奇薄命美 郵税四錢

郵税廿五錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢

● 府南隱士著 (寫真版挿入) 新クレオパトラ 郵税廿五錢  
 ● 府南隱士著 (寫真版挿入) 怪奇新クレオパトラ 郵税四錢  
 ● 羽化仙史著 (寫真版挿入) 怪奇モテル 郵税四錢  
 ● 鹿島櫻葉著 (寫真版挿入) 怪奇變裝の怪人 郵税廿五錢  
 ● 羽化仙史著 (寫真版挿入) 怪奇變裝の怪人 郵税廿五錢  
 ● 松林伯知講演 (寫真版挿入) 休禪 郵税廿五錢  
 ● 松林伯知講演 (寫真版挿入) 休禪 郵税廿五錢  
 ● 大阪時事新報掲載 (寫真版挿入) 休禪 郵税廿五錢  
 ● 松林伯知講演 (寫真版挿入) 休禪 郵税廿五錢  
 ● 池田夕風女史著 (寫真版挿入) 家庭豪遊奇 郵税四錢  
 ● 池田夕風女史著 (寫真版挿入) 家庭豪遊奇 郵税四錢  
 ● 篠原嶺葉著 (寫真版挿入) 家庭ハイカラ夫婦 郵税四錢

郵税廿五錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税廿五錢 郵税廿五錢 郵税廿五錢 郵税廿五錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢 郵税四錢

大學生發兌小說類書目

(14)

鹿島櫻香著 ●小怪秘	羽化仙史著 ●小怪活	羽化仙史著 ●小怪怪	草の家庭人作 ●小戀	草の家庭人作 ●小戀	白鹿庵若舟著 ●小生若	草の家庭人作 ●小戀	篠原嶺業君著 ●小未	篠原嶺業君著 ●小新	篠原嶺業君著 ●小新
密	幽	情	ての	の	の	の	の	の	の
島	婦	體	靈	戀	旅	時	生	妻	行
價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢

行妻生時旅戀靈體婦島

價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢

鹿島櫻香著 ●小英雄	田中桃葉著 ●小庭未	千代天舞著 ●小天舞	大木野城合作 ●小處	篠原嶺業君著 ●小妻	篠原嶺業君著 ●小夫	篠原嶺業君著 ●小糟	篠原嶺業君著 ●小糟	篠原嶺業君著 ●小糟	兩週舍主人譯 ●小死	兩週舍主人譯 ●小死
武	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
士	人	罪	密	姑	み	み	妻	濱	濱	濱
價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢

濱妻みみ姑密罪人武士

價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢

大學生發兌小說類書目

(15)

神山峻著 ●小怪	千代天舞著 ●小天舞	澤水漁著 ●小流	月露行客著 ●小探	羽化仙史著 ●小怪	池田錦水著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪	宮崎來城著 ●小怪
洋	妻	色	破	死	女	天	白	大	臣	鬼	大	學	大	學	大	學
怪	奇	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講	講
談	妾	空	戀	人	會	術	人	學	校	將	校	將	校	將	校	將
價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢

將校學人術會戀空妾談

價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢

羽化仙史著 ●小怪	江島主人著 ●小庭	千代天舞著 ●小天舞	田中桃葉著 ●小庭	影法師著 ●小生	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	五峰小僧著 ●小滑	東明油著 ●小怪
海	戀	婿	我	我	若	女	老	稽	抱	腹	稽	抱	腹	稽	抱	腹
底	奇	行	田	舍	娘	み	アル	婦	庭	師	生	談	談	談	談	談
價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢	價廿四錢

談末舍娘みアル婦庭師生談

價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢 價廿四錢

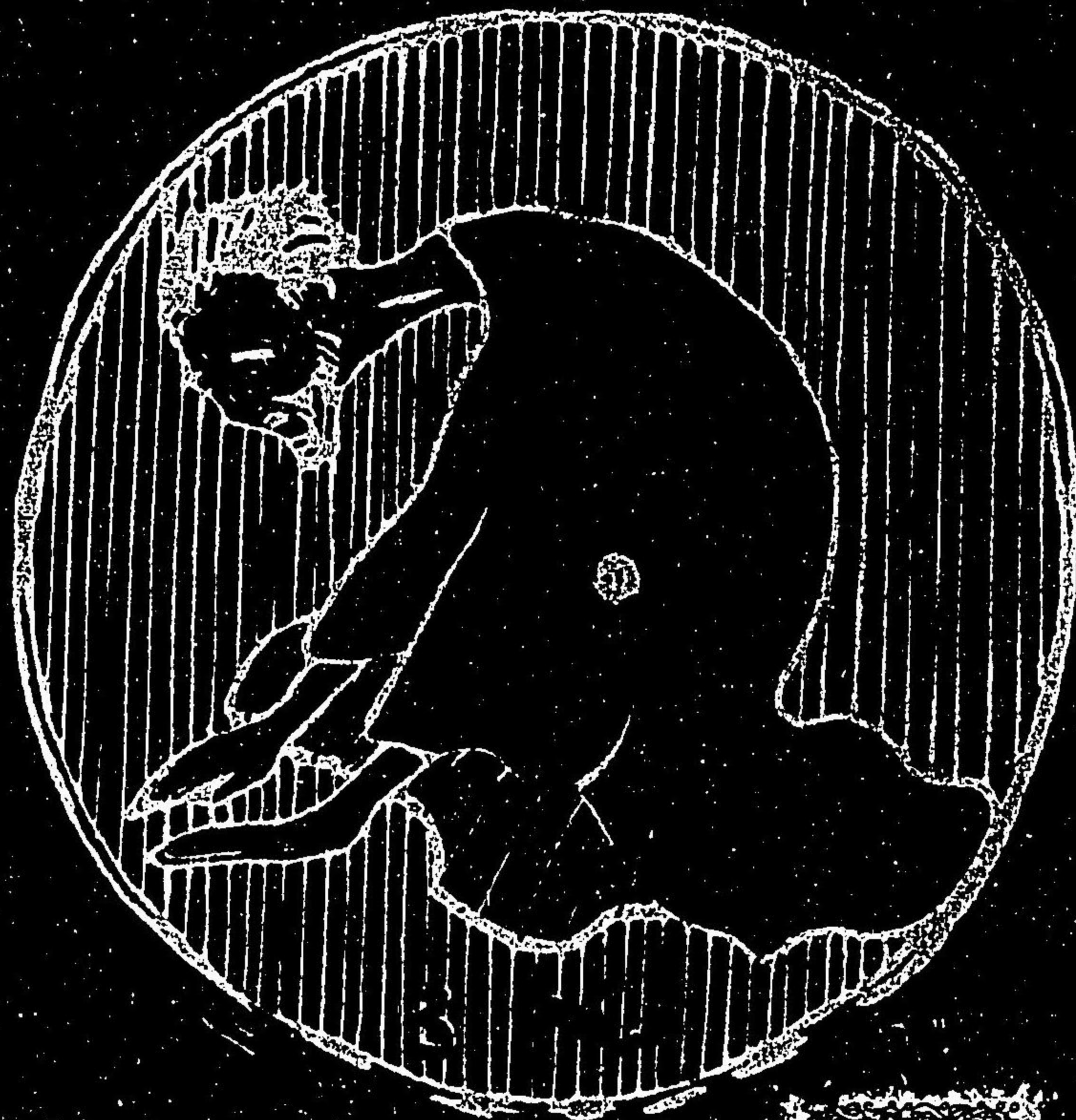




(16) 大學生館發兌小說類書目

篠原嶺葉君著 ●小説怨の戀後編 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	篠原嶺葉君著 ●小説怨の戀後編 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	愛波逸入著 ●小説寂しき女 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	遠藤柳雨著 ●小説心の鬼 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅六錢	篠原嶺葉君著 ●小説妻えらみ （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	千山樓主人著 ●小説野分 （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	三島霜川著 ●小説家の庭の波 （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	無名氏著 ●小説夫婦の心中 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	齊藤吊花著 ●小説虚榮の令嬢 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢
篠原嶺葉君著 ●小説糟糠の妻 （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	三島霜川著 ●小説華族の娘 （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	三島霜川著 ●小説不運の娘 （寫眞版挿入） 價參拾錢 郵稅四錢	無名氏著 ●小説親不知らぬ娘 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	千山樓主人著 ●小説奇毘沙門丸 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	宮地竹峰著 ●小説美少年 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	宮地竹峰著 ●小説苦學團 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	神田伯海講演 ●小説紅皿缺皿 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢	神田伯海講演 ●小説奇談左甚五郎 （寫眞版挿入） 價廿五錢 郵稅四錢





258  
699

093730-000-2

特10-504

滑稽三太夫

五峰 仙史/著

M41

DBQ-1148

